

「わたしに従ってきなさい」 —マタイによる福音書講解説教39—

ダニエル書 第7章 13節～14節  
マタイによる福音書 第8章 18節～22節

説教 岡村 恒牧師

「わたしに従ってきなさい。」(マタイによる福音書 第8章22節)主イエス・キリストは私たち1人1人の魂の奥底までご覧になった上で言われます。主イエスは故郷ガリラヤ地方に戻り、神の国について、お話をされました。山上の説教と呼ばれる主イエスの力のある不思議な言葉は聞く者の心を捉えてきました。主イエスの傍らには次々と痛みを抱えた人々がやって来ました。主イエスがお話になった神の国の力は具体的に苦しむ人を癒し、解放し、救う本当の力だということをお見せになりました。

主イエスが伝道の拠点にしていた家がありました。弟子シモン・ペテロとアンデレの兄弟の家です。シモンの姑が熱病で床についていました。主イエスは病気を治すと、姑はすぐに主イエスをもてなし始めました。この家には次々と重荷を負った人が運ばれてきます。主イエスは大勢の人を癒し、悩み苦しみから解放します。ある人が癒されると、その人が自分の傍らにいる人に主イエスのことを語り、喜びを分かち合います。神の力が、連鎖反応を起こして人々を救い、世界を変えていく、聖書はそれを明らかに記し、歴史はその事実を伝えています。

「イエスは、群衆が自分のまわりに群がっているのを見て、向こう岸に行くようにと弟子たちにお命じになった。」(18節)住み慣れた居心地の良い場所を後にして、決して喜ばしいことが待っているとは思えない場所を目指されます。本当ならここに留まっていたい、これが弟子たちの本心だと思います。私たちも同じことを経験しています。本当は変わりたくない、そう思う日常生活から、主イエスに促されて、既に新しい歩みを始めています。

1人の律法学者が登場します。多くの場合、律法学者は主イエスを論破しようと迫り、最後には殺そうと画策をします。しかし、この律法学者は言います。「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従ってまいります。」(19節)当時の社会では異常な行動でありました。主イエスの答えはとても不思議です。「きつねには穴があり、空の鳥には巣がある。しかし、人の子にはまくらす所がない。」(20節)とだけお答えになりました。主イエスは、旅から旅を続けます。人を訪ね、病を癒し、悪霊を追い出し、十字架にかかって死に、復活され、天に昇り、やがてもう1度来てくださいます。この時まで、

まくらす所がないのです。

聖書は弟子の1人に目を移します。「主よ、まず、父を葬りに行かせて下さい。」(21節)これが弟子の決断でした。この弟子にとって主イエスに従って行くことは優先順位1番ではなかったのです。弟子になる時、信仰の決断は終わっています。しかし具体的な行動は一致しないのです。この時主イエスは言われます、「わたしに従ってきなさい。」私たちは礼拝に集い、聖書を読む時に繰り返しこの言葉を聞きます。

「そして、その死人を葬ることは、死人に任せておくがよい。」(22節)という言葉は地上のことなどどうでも良いという話ではありません。主イエスが何のために地上に来られたかをはっきり言い切る言葉です。私たちは皆、罪人であり死人であります。主イエスはこの死人の世界に突入して来て、私を信じる者は1人も滅びないで永遠の命を得る、そう語りかけて「わたしに従ってきなさい。」と言われるのです。

今日、私たちは終末聖日を迎えています。世界の終りを強く思う日です。例えば、東京から新大阪行きの新幹線に乗り、京都を過ぎると、まもなく新大阪駅に着くというアナウンスがあります。英語では新大阪《ターミナル》と言われます。それ以上先には進まないという話です。それ以外の新幹線に乗ると、新大阪《ステーション》と呼ばれます。単なる通過点だからです。私たちは主イエスと出会う時を単なる通過点として招きを聞いてしまうのです。しかし主イエスは言われました。『私の時が来た。』このお方が終着点なのです。

主イエスを信じ、このお方の元に留まるのが本当の生命を得る唯一の道です。主イエスが共に先立って歩いて下さる道です。信仰を持って生きるというのは、自分で決断して人生を自分で変えていくという話しではありません。神によって促された決断に全身全霊をかけて主イエスに導かれて歩むことです。私たちが自分の力では主イエスに従うことはできない者だからこそ、主イエスの方から招いてくださいます。「わたしに従ってきなさい。」私たちもこの招きに答えて、主と共に一緒に向こう岸に渡り始めれば良いのです。

(記 説教要約奉仕者)